

「腹部CT スキャンの読み方」

平 松 慶 博 東京女子医科大学助教授
河 野 敦 東京女子医科大学放射線科
広 沢 邦 浩 東京女子医科大学放射線科

東京大学教授

田 坂 皓

コンピューター断層撮影の装置は急速に改良が加えられ、画像がだんだん良くなってきている。患者を寝かせて撮影をする口径の部分が大きい装置が多くなって、全身の撮影にも広く使用されるようになった。本書は腹部の診断にCTを正しく使うための指針を示した良い解説書である。

著者の平松慶博助教授はX線診断学の広い範囲に深い臨床の経験と優れた実力とを持っておられる専門家で、X線診断に専念されているすぐれた指導者である。新らしく登場したCTについても、腹部のX線診断の中でこれがどのように役立つのかについて、早くから検討を始めておられる。本書でははじめにCTを正しく使うために知っていることが必要となる基礎的事項が述べられている。次いで、膵臓、肝、胆道系、消化管、脾、副腎、尿路、骨盤腔臓器、大血管、リンパ節、骨格系について、CTの読影のための解剖学的事項、どのようなときに適応があるか、検査の方法はどうかについて要領よく簡潔に解説がされている。またそれぞれ代表的疾患のCT像が示されている。X線診断に加わったこの新しい技術は有効に使用される

ことが要請されているのであるが、河野敦、広沢邦浩両君と共にまとめられた本書は、CTが正しく使用されるために時宜をえた解説書であるといえる。

書評のついでに、少しはなれて申し訳けないが、少しこれと関係して読者に希望を述べさせていただくことにする。CTがわが国で急激に普及していることは驚くべきことである。新しい技術を医療の中に積極的に取り入れてゆく意欲は大変結構なことである。しかし基礎がしっかりしていないため、適切な使用がされていない場合もずいぶん多く見られるようである。腹部の診断にCTが効果的に無駄がなく使われるようにするためには、脳疾患の診断におけるCTの役割を比較のために考えることも必要であろう。脳については、CTが使えるようになる前後では、検査の進め方に大きな違いがおこった。これは第1には、病変の存在や性質の判断がCTによってはじめて可能となったり、判断の確かさが大きく増すことが稀でないことがはっきりしたことによる。第2には、CTによる判断が治療方針を決めるのに大きく影響し、適切な治療を実施するのにしばしば役立つこ

とが証明されたことである。第3はCTの使用が治療成績の改善に寄与することが期待されるからである。治療成績向上についての評価は、個々の疾患の多数例について、比較的長い期間の追跡で判断しなくてはならないので、簡単ではない。しかし、たとえば脳腫瘍のような急性疾患では、すでにCTの使用によって治療の改善が大きいと考えられるものがある。腹部の疾患についてのCTの評価もこれと同様な点について進めるべきであるが、脳に比べると簡単ではない。すでにいろいろと精度の良い検査がほかにあって、病変の存在や性質について判断ができるからである。CTを使うことで、診断を容易にしたり、診断の確実性を大きく変えるのはどんな場合かをまず良く検討する必要がある。このためには、診断に携わる医師はX線診断学について基礎的にもまた臨床的にも十分な知識を持ち、しかもCTの特性を理解しておくことが必要となる。本書はこのような検討の開始に当たっても良い手引きとなると考えている。

B 5, 頁 196, 図 23, 写真 285, 色図 3, 1979, ¥ 7,200, 〒 200 <医学書院刊>